

寺報

平成二十九年八月
第七十七号

正念寺護持会発行

常陸太田市久米町二十一

電話 〇二九四一七六一二〇五八

FAX 〇二九四一七六一〇一六九

お盆

地獄の釜の蓋つて本当に開くの？

お盆によく聞くのが、「地獄の釜の蓋が開いてご先祖が帰ってくる」と言う言葉ですが、皆さん平気でこんなこと仰っています。本当に大丈夫ですか？地獄の釜の蓋が開いて、ご先祖がそこから帰って来るといふ事は、言葉を換えれば、「あなたのご先祖は、いつもは地獄で苦しんでいるんだよ」と言う事になりますよね？

そもそも「お盆」は、元々「盂蘭盆」と書きました。それが短くなって「盆」だけになったわけですが、インドの言葉の「ウランバーナ」に漢字を当てたのが「盂蘭盆」ですが、言葉の意味は「逆さにつるされるような苦しみ」といふ事です。

この「お盆」は、お釈迦様の弟子の目連尊者の餓鬼道に落ちた母の故事に由来しています。その母親が、餓鬼道の世界から抜け出し、浄土往生された事を喜び、うれしさのあまり皆で踊り出したと言われています。それが「盆踊り」の始まりだそうですが、



鎌倉「光明寺」地獄絵

地獄に落ちているご先祖と、浄土往生したご先祖。皆さんは、どちらに手を合わせるのでしょうか？
ところで、インターネットでいろいろ見ておりましたら、次のような事を書いている「神道研究家」といふ方がおりました。
『位牌に入っている先祖とお墓にしか入れない先祖、地獄から出てきた先祖などがお盆に再会する。位牌に入っている先祖はある程度高いところにかかれた人達で、地獄から出てきた人にとつては、短い期間ですが、同じ家筋の高いところの方から人としての生き方、考え方などいろいろ話を聞いて、地獄から出られるための気づきをもらいます。そしてお盆が終わる十六日の送り火にはそれを合図に元いた場所に戻ります。』

なんとまあ、神道を研究している方が、仏教の事をわけ知り顔でよく言ったものだなあ、と言う気持ちです。
仏教で言う『地獄』とは、自らが犯した罪によって自ら作り出される世界なのです。自らが犯す罪とは、一つには「欲望」があり、一つには「怒り・腹立ち」があり、更に「真実を見ない」といふものがあります。

私たちは、苦しくなると、この苦しみをつくったのは「親のせいだ」「夫もしくは妻のせいだ」いや「上司のせい」だ、などと原因を他人になすりつけ、実は自分の欲望や怒りや真実から目をそらしている自分に原因がある事にしつかりと向き合わずに生活をしてしまいます。これこそが「私が地獄に落ちる罪」であり、親鸞聖人が「地獄は一定すみか」と仰る所以でもあります。

私たちは、「お盆」といふ行事を通して、ご先祖と自分が「ご縁」で常にいつでも繋がっている事を確認し、自らの犯している罪としつかり向き合い、「真実」を見つめよと常に私に語りかけ続けている「南無阿彌陀仏」のお念仏の声を聞き続け、心静かに自らの姿と向き合っていきたいものです。

目連は、正しくは目犍連と書きますが、略して目連と呼ばれ、釈尊十大弟子の一人で、神通第一と言われました。大変容姿端麗な今で言うイケメンで、様々な学問に精通していたと伝えられております。
その目連の母親は、我が子かわいさの余り、我が子のためだけに食物はもちらんの事、様々なものを集め、それこそ食欲に取り憑かれたような様であったため、餓鬼の世界に落ちて苦しんだと伝えられております。

しんらんさま

【第五回】

さて、親鸞聖人 三十九歳の年に流罪が解けるわけですが、その後どうされたのか？本願寺派の言うところ（覚如上人の書かれた御伝抄）に依ると越後から直接常陸方面に向かった訳ですが、仏光寺派や高田派に伝わる伝記には、京都に戻ったとあります。そもそも親鸞聖人が流罪の罪を処せられたのは京都に於いてであり、その罪が許された時には京都に連れ戻され、そこで正式に赦免の沙汰が下されたのではないのでしょうか。その後、師匠の法然聖人・妻であった玉日と会いたかったのでしょうか、師法然聖人も妻玉日も既に亡くなっており、墓参りをしてややしばらく経って、関東へ向かった（仏光寺派伝絵に依れば十月）のではないのでしょうか。高田派の正明伝には「哀愁の涙に沈みつつ、そのおりふしの事どもまで語出されたり」とあり、親鸞聖人の悲しみや人間味がにじみ出ておりますが、そうしてキチンと礼儀・筋を通してから関東に向かったとみる方が、人間親鸞をより際立たせてくれるような気がします。

直接か京都経由かはともあれ、親鸞聖人は関東へ布教の旅に向かう事になります。そして、関東で最初に落ち着いた場所が下妻・小島の草庵であった事は、正明伝にも恵信尼文書にも共通しており、関東に向かった理由はともかく、まず間違いの無い所でしょう。その後、下妻辺りは、当時湿地帯であったと考えられており、生活するには不便であったため、その地から稲田（現笠間市稲田）に居を移して、ここを拠点に常陸国（現茨城県）・下総（現千葉県北部）・下野（現栃木県）等での布教を精力的に続けられたと考えられます。この拠点を移した理由についても様々な説があり、正確なところを知るにはまだまだ追いつく事が出来ず、今ここでは、単に「移った」とだけ書いておきます。

ところで、この稲田を中心に布教活動されていた時代に、浄土真宗にとつては非常に大切な聖典である顕浄土真実教行証文類（教行証文類と略す）の執筆が成されました。この教行証文類は、常陸国在住の元仁元年（一一二四年）四月十五日に草稿本が完成したときれていますが、親鸞聖人 九十年のご往生まで、常に加筆推敲を続けられており、未完の書とも言われております。こうして聖人は、教行証文類という大切な書物を書きながら、常陸国（茨城県）各地を歩き、約二十年布教を続けられました。こうして常陸国・下野国・下総国などに沢山のお弟子が生まれ、大きな真宗門徒集団となつていきましたが、聖人六十三歳の頃、京都へと戻られる事になります。その理由ははっきりとしておりませんが、教行証文類の完成に向けて、より經典に触れやすい都に戻ったのだという説や、鎌倉幕府が出した念仏禁制のせいだと言う説など、他にもいくつかの説が述べられておりますが、どの説もあくまで推測の域を出るものではありません。ただ、京都へ戻られたという事だけははっきりしております。

今回は、京都へ戻られてからの聖人の動向を考えてみましょう

（つづく）



ご門徒さん紹介

那珂市中里在住 小坪一義様
こあくつ かずよし

今回ご紹介するご門徒さんは、組木細工でティッシュペーパーケースを造られている那珂市中里の小坪一義さんです。小坪さんは、十五歳の時に指物師に弟子入りして技術を修めました。残念ながら親方の会社が立ちゆかなくなりました事もあり、別な会社に再就職をされ勤め上げましたが、退職後に少年時代から学び自分のものにした指物の技術を生かしながら、ティッシュペーパーケースを造っています。様々に木を組み合わせながら、その木目を生かして作り上げていますが、人工漆

(カシュー)を何度も塗り重ねて造られるそのケースは、光沢の深いなんとも見惚れてしまう美しさを持っています。木をこんな組み合わせにしたらもつと面白い物になるんじゃないかな?と語る小坪さんの笑顔は、木への

慈愛に満ちた顔でした。



『歎異抄』の作者、唯円坊の墓

唯円坊のお墓は、奈良県吉野郡下市町の立興寺本堂裏の山を登った所にあります。水戸市の河和田町にある報仏寺の開基でもありますが、唯円坊の晩年は、布教の為もあつて吉野に住んでおられたようです。立興寺の前住職様のお話によると、下市町という所は、高野山の麓でありながら、真宗門徒の多い町だそうです。緑の多い素敵な街という印象でした。



立興寺山門



袈裟切りのお名号



唯円坊のお墓

感謝録

「ご寄付を戴きました事に感謝を込めてご報告させて戴きます。」

一、義母の永代経として

金 壹拾万円

小澤 良明様



教えてください

皆さんの回りに、何か特技を持った方いらっしゃいませんか？

何か自慢出来るもの持っている方いらっしゃいませんか？

紙細工の得意な方や木工の得意な方。是非教えてください。そして、「ご門徒さん紹介」の欄で紹介させていただきます。

よろしくお願い致します。

募集中！

聞法会々員募集

毎月八日 午前九時三十分より

仏教に関するいろいろな事をみんなで一緒に学びましょう

九月からは、普段の生活で何気なく使われている仏教の言葉を学んでいきます。例えば、「ありがとう」なんていう言葉も仏教から来ている言葉なんですよ。

来年度連続研修会受講生募集

年間四回 二年間（二月期は一泊）

一年に四回、二年間、沢山の仲間と一緒に仏教や真宗の事、日常の生活と仏教・真宗との関わりなどをみんなでワイワイガヤガヤしながら考えていきます。

二月の一泊の時には、筑波山中腹の温泉旅館で、一杯やりながらカラオケをしたり、喧々諤々意見をたたかわせたり、楽しくやります。

住職雑感

この夏は、七月上旬の時点で既に三十度を大きく超えた日もありましたが、本当に年々暑くなっているような気がいたします。

地球温暖化の問題が言われて、結構な年月が流れているように思いますが、地球規模でそれぞれの国が、人が考えなければならぬ問題ですので、一朝一夕に解決できることではないでしょうが、なんとか世界の英知を集めて問題解決の方法を見つければ有り難い事です。

それで無くともこの地球上には非常に多くの問題が横たわっております。この少ないスペースで一つ一つ挙げる事は出来ませんが、ざっと見ても「テロの問題」「核の問題」「賃金格差の問題」「戦争の問題」「難民の問題」などを簡単に挙げる事が出来ます。

仏教が本当の意味で働き、欲望・怒り・無智という三毒の煩惱の解決に動いたならば、大きな力になると思うのですが、現実にはなかなか声を出し、実行すると言うまでには至っていないのが現状です。それは、私も含め宗教者が、大きく反省しなければならぬ事でしょうが、少なくともまず自分が小さな一歩でも良いから、三毒の煩惱をしっかりと見つめ、お念仏の正しい智慧に導かれる踏み出しをしたいものです。